

令和2年2月11日現在

I 趣旨

義務教育学校萩野学園が開校し、5年経過しようとしている。このたび、成果等について検証を行い、令和3年度開校予定の義務教育学校明倫学園の教育課程、及び他の中学校区における小中一貫教育の取組について、方針を明確にする。

II 検証方法（根拠等）

- (1) 萩野学園学校評価
- (2) 萩野学園学校運営協議会、新庄市小中一貫教育推進協議会
- (3) いじめ・不登校等調査
- (4) 全国学力学習状況調査、全国標準学力検査（NRT）
- (5) 成果等検証アンケート（教職員・児童生徒・保護者対象 令和元年12月）
- (6) 教育相談、教職員及び児童生徒のヒアリング（面談）ほか

III 成果

児童生徒、保護者、教職員へのアンケートやヒアリング、検証委員会により、特に成果があった項目を絞って記載する。

1 主に「1年生から9年生まで毎日一緒に過ごすこと」の成果

(1) 自己肯定感が高くなっている。

- ① 平成31年度全国学習状況調査（6年生、9年生対象）によると、「自分にはよいところがある」でプラスの評価をした児童生徒は全国平均より大きく上回っている。
- ② 校長が8年生・9年生と個別面談をした際、生徒から萩野学園のよさについて多くの話をきくことができた。小さい子と一緒に生活できることについては、ほとんどの生徒が喜びを感じている。生徒は、萩野学園に誇りを持っている。
- ③ 学校評価では児童生徒の「学校が楽しい」の項目は平均3.6ポイント（4段階評価）と高い。

(2) 上の学年がやさしくなっている。下の学年は、上の学年にあこがれの気持ちをもっている。上の学年を目標としている。

- ① アンケートによると、児童生徒・保護者・教職員すべてが最上位の項目となっている。
- ② 表情がやわらかい。素直である。あいさつができる児童生徒が多い。
- ③ 児童は上級生の行事や集会の姿をみて「自分もこうなりたい」「目標となる」という声が多い。
- ④ 後期ブロックは、低学年の子と日常的に交流することで自身の心が豊かになることを自覚している。下学年の子は、7～9年生が同じ学校に登校し校舎にいることで安心している。

(3) 思いやりの心が育つ。児童生徒の人間関係がよい。

- ① アンケートによると、児童生徒・保護者は上位から2番目の項目、教職員は上位から3番目の項目となっている。
- ② 児童の声は上級生について「声をかけてくれる」「思いやりがある」「優しい」「いろいろなことを教えてくれる」が多い。

(4) 問題行動が減少している。

- ① 落ち着いて学校生活を送っている。人間関係が良好である。
- ② 個別に配慮が必要な児童生徒のトラブルはあるが、生徒指導上の大きな問題行動はほとんどない。特に上の学年は下の学年の目標となっている。
※ いじめ件数については、いじめのとらえ方、認知の仕方が変わったことや、現在は積極的に認知をしているため過去との比較はできない。

(5) 社会のルールを守る、安全に生活するなど、自律の心が育っている。

- ① 学校評価では、児童生徒・教職員の評価で、全ブロックが共通して高い項目となっている。
- ② 異学年が一緒に過ごすことで、自律の気持ちが育っている。
※ アンケート「1年生から9年生まで毎日一緒に過ごすこと」の項目について「よさは感じない」を選んだ割合
・児童生徒5% ・保護者5% ・教職員0%

2 主に「義務教育学校の特色（9年間の系統性、異学年交流、教科指導など）をいかすこと」の成果

(1) 不登校が減少している。

- ① 後期課程1年目となる7年生について、新規の不登校がほとんどないことが続いている。（後期の不登校生徒はいるが、前期からの継続である。）出現率は前期0.4%、後期3.5%と市の平均より低くなっている。
- ② 人間関係の変化がなく、安定している。

(2) 学力が向上している。

- ① 学力について、次第に全国平均を上回るようになってきた。特に後期課程は市内の各校と比べ伸びが大きい。（平成31年度全国学力調査）
- ② 教科担任制を取り入れている5・6年生で定着率が上昇している。全国標準学力検査の経年変化では、5・6年生で伸びが見られる。
- ③ 授業のスタイルが全ブロック共通している。かつての小中学校の差異がない。
- ④ 8・9年生の書く力が高く、後期ブロックの力がついている。
- ⑤ 小学校で指導済みのものを中学校で教え直すことがなく、効果的に指導することができている。
- ⑥ 児童生徒同士のよい関係が、学習にいかされている。学校評価では、特に中・後期ブロックで「授業でわからないことを友達に聞くことができる」の項目で自己評価が高かった。

(3) 小学校の教科担任制、乗り入れ授業等で成果が出ている。

- ① アンケートによると、児童生徒と保護者は上位から3番目の項目、教職員は最上位の項目となっている。
- ② 中期ブロックから教科の専門性をいかした授業を受けており、学習の定着につながっている。

(4) 児童生徒理解がより深まり、9年間寄り添って指導することができている。いろいろな教職員がかかわり、対応することができている。

- ① アンケートによると、児童生徒・保護者は上位から3番目の項目、教職員は上位から2番目の項目となっている。
- ② 小学校籍、中学校籍の教員が同じ方針で指導ができている。1つの職員室で日常的に情報共有ができる。9年間継続して指導、情報を共有することができ、児童生徒に寄り添うことができている。1人に対して多くの教職員がかかわっている。

- ③ 児童生徒から、いろいろな教職員と学習したり相談したりすることがよいという意見がある。
 - ④ 特別支援教育コーディネーターを中心に、特別な支援を要する児童生徒について、手立てを共有し継続して指導している。
- (5) 教育課程や学習環境で特色をいかすことができる。
- ① 各ブロックでの必要な行事や1年生から9年生までの合同の行事等が精査されている。行事を無理なく進めることができ、児童生徒の負担が少なくなっている。
 - ② 図書室は、絵本から幅広い本がそろっている。上の学年が絵本を手にとったり下の学年が大人向けの本を読んだりしているのは、本校ならではの姿である。
- (6) 異学年の行事・活動で力がついている。
- ① 縦割り掃除、運動会、芋煮会など、異学年との活動を通して、思いやりの心の育成、社会性・コミュニケーションの力が育っている。
 - ② アンケートによると、児童生徒と保護者は最上位の項目、教職員は上位から2番目の項目となっている。
- (7) 4年生、7年生、9年生で早くリーダー性が育成されている。
- ① アンケートによると、児童生徒は上位から2番目の項目となっている。
 - ② 早い学年から児童会や生徒会に参加し、リーダー性が育つ。また行事ではそれぞれのブロックにおいて主体性が見られる。
 - ③ 行事等、学校生活の様々な場面で、各ブロックの役割分担が明確になり、リーダーとなる機会が多くなっている。
- (8) 5・6年生の意識が高くなっている。
- ① 5・6年生は、後期ブロックと同じ日課表、制服を着用し、後期ブロックの生徒の姿を見ながら生活している。
 - ② 学習への意識が高くなっている。早くから高校進学への見通しをもつようになる。
 - ③ 6年生の部活動など、様々な理由で学習や自律への意識が高くなる。
- (9) 中1ギャップによる不適應がない。
- ① 4-3-2制により、中1ギャップがない。
 - ② アンケートによると、保護者は上位から2番目の項目、教職員は上位から3番目の項目となっている。
 - ③ 小規模校から進学したことによる不安や不適應がない。
- ※ アンケート「義務教育学校の特色（9年間の系統性、異学年交流、教科指導など）をいかすこと」の項目について「よさは感じない」を選んだ割合
 ・児童生徒2% ・保護者2% ・教職員0%

3 主に「地域や教職員に関すること」の成果

(1) ふるさが好きになっている。

- ① 平成31年度全国学習状況調査（6年生、9年生対象）によると、「今住んでいる地域の行事に参加している」「地域や社会をよくするために何をすべきかを考えることがある」でプラスの評価をした児童生徒は全国平均より大きく上回っている。
- ② 学校評価では児童生徒の「新庄市や自分の住んでいる地域が好き」の項目は平均3.5ポイント（4段階評価）と高い。

- ③ 8年生、9年生は、ふるさと学習への関心が高く、課題意識をもって学習に励んでいる。
- ④ 学校運営協議会では、地域についての学習を話題にし、総合的な学習の時間における協力をいただき、大変効果が表れている。
- ⑤ 新庄市小中一貫教育推進協議会では、学校から萩野地区、泉田地区、昭和地区の物的・人的資源を活用した教育活動について成果の報告があり、市内全体で共有することができた。

(2) 行事の姿がよい。地域での評判がよい。

- ① 後期ブロックの8年生、9年生の姿がよい。運動会や合唱の姿がよい。
- ② 学校運営協議会では、学園祭での姿や表情から、下の子は上の学年を見て学んでいることよき、日常の指導・取組の成果について意見をいただいている。
- ③ 総合的な学習の時間について、地域での取材や体験学習を行ったとき、生徒について褒めていただいている。

(3) たくさんの教職員がいることで成果が出ている。

- ① 国や県の加配が短時間勤務を含め7名配置されている。教頭3名、教務主任3名の学校はほかではみられない。組織がしっかりしており、一人一人にきめ細かい指導ができる。
- ② アンケートによると、児童生徒は最上位の項目、教職員は上位から2番目の項目となっている。
- ③ 学校事務職員が複数いることで、より正確、円滑に業務を遂行することができている。

(4) 教職員の一体感がある。教職員の資質・能力が高くなっている。

- ① アンケートでは教職員は「教職員の一体感」が上位から3番目の項目となっている。
- ② 小学校籍と中学校籍の教員同士が、児童生徒理解や学習指導方法について、学び合っている。指導方法について互いの文化を知り指導していることが、問題行動の未然防止につながっている。
- ③ 校内研究を、同じ視点で進めることができ、授業改善で成果が出ている。
- ④ 中学校の教員が5・6年生の教科指導をすることは大変勉強になる。
- ⑤ 学校運営協議会では、小学校籍や中学校籍の教職員が互いに苦労を思いやっていることが話題になった。
- ⑥ 学校評価で、保護者から「学校に行くと、教職員の仲のよさ、雰囲気のよさを感じる」という意見がある。児童生徒から「先生方の仲がよさそう」という意見をいただいている。
 ※ アンケートで「地域、教職員に関すること」の項目で「よさは感じない」を選んだ割合 ・児童生徒7% ・保護者10% ・教職員2%

IV 課題

- 1 各ブロックの意義を確認し、それぞれの目指す姿を共有し、さらに伸ばしていく必要がある。特に、出口となる9年生のより高い姿を求めていきたい。また、中期ブロックの6年生と7年生をより伸ばしていきたい。そのために、学習活動や行事等、ねらいや方法を吟味するなど教育課程を工夫していく必要がある。
- 2 学校評価では、たくまさが足りないという結果が見られた。また良好な人間関係を築いているものの、固定化していくことでマイナス面も懸念される。そのために、中期ブロックから後期ブロックにかけて、児童生徒の意識をより外に向けていき、校内だけでなく社会とかかわる力をより高めていく必要がある。
- 3 体力の向上について、体力・運動能力テストでは大きな落ち込みはないが、5・6年生の休み時間がないことやバス通学で運動量が減っていることの影響がないようにするために、運動の機会を増やすことを検討している。運動施設環境

が整っていること、7年生の水泳授業、6年生の部活動等、他の学校にない特色をいかしながら、いろいろな指導について考えていく必要がある。

4 アンケート「地域や教職員に関すること」の項目は①地域とのつながり②ふろさと学習③保護者同士のつながり④教職員の一体感⑤豊富な教職員数であるが、保護者から「よさは感じない」が10%と高くなった。記述が少なかった「地域とのつながり」について、取組や特色について共有し、さらに工夫していく必要がある。

5 義務教育学校の特色でもある、国語科、数学科、社会科、英語科の教科教室について、生徒は「集中する」「教科に合った空間で充実している」「他学年の学習内容がわかり次の学年の内容に興味がわく」などの意見を書いている。今後も学力向上につながる教科教室の運用について、さらなる充実を図っていく必要がある。

※ 検証委員 萩野学園 校長 教頭 教務主任 P T O 会長 副会長 10名
(事務局) 学校教育課 社会教育課 5名